

今とはかなりちがう事やろう

三月二十日 金曜日 大きくなって鈍くなったのかなあ

夜、うとうとと夢を見ていた。

冬の夕暮れから、晩の時のようだった。

祖母は七輪に炭をおこした後、
急にいなくなった。
母もいない。

少し、寒気がする。

外からの光も弱まり、あたりがみるみるうちに
暗くなってきた夕暮れである。

ひっそりと古ぼけた家の窓を僕はのぞき込んでいた。

そこには、幼い頃の僕と弟の京太がいた。
二人は、鉄瓶のかかった七輪をかこんで、
ケタケタと、あどけない笑い声を出していた。

静かに耳をすますと、鉄瓶から出る
不思議な音色が、心地好く、
外にいる僕らの耳にかすかに聞こえた。

七輪にかけた鉄瓶で、二人は無邪気に、
遊びに熱中している。
二人は、あたかもそれが自分の宝物の様に、
目をギラギラして、熱心な顔だった。